
気取ってやがるわ。

留め金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気取ってやがるわ。

【Nコード】

N5626I

【作者名】

留め金

【あらすじ】

悲しいヤツ、可哀想なヤツを気取った

馬鹿な主人公の馬鹿なお話。

鳴らない目覚まし(前書き)

初投稿です。

よろしくお願ひします。

鳴らない目覚まし

ガタン、ゴトン。

揺れる電車の中で今日も思う。

『気取ってやがる』

前の席が空いていたにも関わらず、座らずにつり革を掴んで立っている。

その立ち方すらも、人から見れば『具合が悪い』ように見えるような立ち方だ。

自分の降りる駅に着くと、決まって俺は人を掻き分け、『すいません』と

言いながら降りていく。これも気取ってる証拠だ、俺に言わせれば。

3

この春高校生になった俺だが、中学の時と変わらず、学校では道化を演じていた。

明るく、運動も、勉強も出来る、優等生。そうさ、それを鼻に掛けて気取ってたんだ、俺あ。

とつくとーに死んだ親の唯一の遺品の一軒家に帰ると、いつもいっつも

近所のおばさんが居座ってたんだ。畜生、俺の家なんだぞ、心配なんか邪魔なだけだ、糞食らえ。

「あらお帰りぼっちゃん。」

そう言っておばさんは勝手に持ち込んだ煎餅をバリバリ言わせながらテレビに視線を移した。畜生、ボロボロボロボロこぼしやがって、掃除すんの誰だと思ってるんだ。

いつもいつも、俺の帰る時間に必ず居て、勝手にテレビをつけて韓流ドラマを見てるんだ。

何が面白いのか、悲しいのか、笑ったり、おんおん泣いたり、感情制御の出来ないババアだ。

俺は手洗いうがいを済ませ、ジュースのボトルとコップ、それからポテトチップスの袋を

一つ持って、二階の自分の部屋へと上がった。

ああヤダヤダ。

そう思いながら、バリツと音を立ててポテトチップスの袋を開けた。そしてジュースのボトルの蓋を開け、コップにそれを注ぐ。

鞆から数学の教科書とノートを取り出し、そして宿題と予習を始める。

こんな規則正しい生活をするのも、学校での道化を演じきるために必要なことだったのだ。

俺は元々特に頭が良い訳ではない。小学校では上から十五番目と、普通だったし、

中学でも、一年の頃は何も目立たず、成績も至って普通。変わったのは二年になってからだだった。

とある女子が、俺の噂をしているのを聞いてしまったことから、俺の『気取った人生』は始まりを告げてしまったのだ。

その子は学年でも可愛いと噂されるモデルのような子だった。もっとも、その当時は

俺はその子のことなど眼中にはなかったのだが。

その子が俺のような目立たない、暗いやつの噂をしていた。

『望月くんて、かつこよくない？いつも一人で本読んで、ミステリアスで

なんかすごい魅力あると思わない？アタシ、望月くんのこと好きかも！！！』

そんな言葉を聴いてから、俺は他人に明るく振舞い、勉強も運動も頑張り、

皆から好かれるヤツ、に成り果てた。そう、俺はミステリアスなどで居たくはなかった。

ミステリアス、すなわち不思議。

それは他の人と違い、異端であることを示すように感じたのだ。

そんな昔のことに思いを馳せながら俺は今日も道化のために勉強をしていた。

そのうちに日が暮れて、ガチャンと言う音と共におばさんが帰ったのに気づいた。

そして俺は一階に下りて、おばさんの散らかしたゴミや、煎餅の力などを掃除する。

自分の分の夕飯を作って食べて、風呂に入って、また二階に上がって

それからいつもの時間まで勉強して、目覚ましをセットして床につく。

明日の朝もきつと、気取った起き方をして、気取った朝を迎え、そして

気取った学校生活を送るのであるう、それが嫌で仕方がなかったが、俺には

それ以外での他人との付き合い方がイマイチ解らなかった。

朝を迎える。

いつものように、目覚ましになる前に起きた、

はずだった。

時計を見ると、もう午前9時を回った処だった。

鳴らなかった目覚ましをよく見る。

確かに午前6時にセットされていたが、鳴らなかった。

壊れたのか、俺が気がつかないで寝ていただけなのかは定かではないが、

ともかく遅刻なのは解り切っていた。俺は急いで準備をして、通勤ラッシュはとうに過ぎた電車に乗った。

きつと、此処からだろう。

俺の道化、そして気取った人生がまるで雪崩のように崩れ去って行ったのは。

鳴らない目覚まし（後書き）

続きます。

頑張って書きますのでよろしくお願いします。

聖戦（前書き）

続きです。

お楽しみいただけると嬉しいかぎりです。

聖戦

ガタン、ゴトン。

通勤ラッシュを過ぎた電車に乗るのは久しぶりだった。

出かけるときも交通費を気にしていつも自転車を使っていたからだろう。

俺の乗っていた車両は、俺の他に、年寄りの夫婦と、大学生だろうか携帯をいじくりながら足をせわしなく組み替えている男だけだった。

俺の高校は家から大分遠い。

そのためいつもは七時半には用意をして家を出ている所だったのに。

どうして目覚ましが鳴らなかったのかはわからない。

俺が聞き逃したただけかも知れないけれど、何故だかそうじゃない気がした。

空いている電車に乗っている所為か、思考が落ち着かない。

それゆえ道化を造る事を忘れていた俺は、ありえない事を考えてた。

『家に帰りたい』

遅刻したのだから、風邪を引いたとか言って休めば良かったな、とかじゃない。

家に帰りたい、学校に行きたくない。もう道化を演じるのは嫌だ。

小さな時の記憶には両親が居なかった。正確には居なかったわけで

はないが、

遊んでもらった記憶が無ければ、俺はもう顔すら覚えていなかった。

甦る記憶は友達と楽しそうに遊んでいるものばかりだった。

実際には、よく思い出せないが楽しくはなかった気がする。

昔から大人びてると言われていた気がする。そんな俺だからきっと
同年代の子供と遊んでいるのは、楽しくなかったんだろう。

思えばこの頃から道化は發揮されていたのかも知れない。

友達を悲しませたり、嫌われたくないから、楽しそうに遊ぶ。

そうしなきゃ、いけない。

『終点』…』

聞きなれた運転手の声が終点を告げる。

「ああ…」

少し溜め息をついた。

乗り過ごしてしまったのだ。

仕方が無い、と思って俺は携帯を取り出し、学校に欠席の連絡をした。

ちようどよく担任の先生が出て、「大丈夫なのか」とか、「無理は
しなくていいからな」とか

そんなことばかり言われた。俺は全部に「はい」とだけ答えて電
話を切って、携帯の電源を切った。

終点の駅は、知らない所だった。

都会だった俺の住む街から大分離れた所為か、空気からすでに
透き通っていて、純粹で、静かで

泣きはしなかったけど、感動した。

できることなら、このホームの真ん中に大の字になって倒れこみた
かった。

俺はゆらゆらと歩き出し、鞆からスイカを取り出して改札を出た。

ぶわ、と春らしい暖かな空気に俺は全身を包まれた。

俺は声に出して笑いながら誰も居ない、車も走っていない道路を一
直線に駆けた。

何かに蹴躓き、顔からコンクリの道路にぶっ倒れた。

痛いけど、それ以上に楽しくて仕方が無かった。

こんな気持ちになったのは始めてだった。

あはははは、と馬鹿みたいに笑いながら俺は鼻を掠った事により出
た血も気にせず走った。

ぴっ、と俺の頬に鼻の頭から出た血がつく。

それに気づいて、少し足を止めて俺はぐっ、と袖で血を拭いた。
が、拭った後にこれが制服だと気がついて、しまったと思った。

血は乾くとなかなか取れないのを俺はよく知っている。

昔は友達と共に崖のぼりをして遊んだりしてよく肘や膝などを擦り剥いては、

服のありとあらゆるところに真っ赤な血をつけて近所のおばさんに怒られた。

怒られたのは母さん、父さんでもなく近所のおばさんだった。

小さな自分の手で服の血を洗い流すのはとても大変で、お湯で洗い流そうと頑張つて、余計に染みが酷くなった記憶がある。

少し頭の中が冷えてきたのか、俺は脚を止めて上を見上げた。

青い空は白い雲をゆらゆらと流し続け、明るい太陽は

俺を焼こうとしているのではないかと思うくらい明るく、俺を照らしていた。

俺は、これ以上此処にいる意味はないと思ってもと来た道を辿って、駅のホームに降り立った。そしてゆっくりと貧乏ゆすりを始めながら電車を待った。

フアアアアアアン…

そんな騒音を立てながら電車が俺の目の前を通り過ぎた。

通過電車は大嫌いだった。

走り去る前も、走り去った後も、強風を巻き起こして終わりだ。被っている帽子が飛ばされたことも幾度と無くあった。

ピロピロと音楽が鳴り響き、電車が音を立てて停車し、俺の目の前

で止まった。

こんな変な時間。しかも平日だからか、俺の乗った車両には誰ひとりとして客は乗ってはいなかった。

ぼけっと目の前の通り過ぎる景色を見つめ続けて、俺はまた終点まで乗り過ぎるところだった。

「次は…」

見知った駅名がドアの上の電光掲示板に表示される。

俺は慌てて立ち上がり、バランスを崩してあわや電車の中を転げまわりそうになった。

プシューウ…と言う音と共に俺は駅のホームに降りて帰路に着く。

<製作中>

聖戦（後書き）

製作中です。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5626i/>

気取ってやがるわ。

2011年1月20日02時00分発行